

中世末期におけるアンヴェルス国際市場の生誕(下)

J・A・ファン・ハウテ

中 澤 勝 三 訳

中世におけるイングランドの発展は、歴史上最も目覚ましい経済革命現象の一つである。当初輸出に向けられた原料の大生産地であったこの国は、14・15世紀が進むにつれて、農業経済上の諸変化、ことにエンクロージャーと大農場の増加とがますますその数量を多くしていた羊毛を自国で製造し始めたのである(1)。こうした王国の経済構造上の大きな変化は、やがて一方でその輸出貿易の性格を変え、他方でネーデルラント市場の運命に深刻な影響を及ぼすことになっていった。

たしかにこの革命に至るまでは、イングランド産羊毛の大部分はネーデルラントに輸出され、そこで地域的な毛織物工業によって加工されるか、もしくはヨーロッパの繊維工業の他の中心地へと再輸出されていた。この貿易の動向に対する王権力の影響もきわめて大きいものであった。不可欠なこの原料をもって、ネーデルラントの経済生命の基礎さえ掌中にしていると意識したために、イングランド王は13世紀末以降何度となく、彼らの外交に故意に従おうとしない頑固な公国への羊毛の積み出しを妨害した。ことにフランドル伯領は、羊毛ステープル制度が一つの決められた市場へ向けて彼らの国の輸出品を集中することがイングランド当局に可能となってからこの不興の影響をしばしば被っていた。何年かにわたって、とりわけ1296年から1298年、1315年から1318年、1338年から1340年において、このステープルがアンヴェルスに置かれたのは、この政策の結果による。とはいえ、1341年以後は、ブリュージュがこの制度の本拠地となり、これは1353年まで続いたが、この年に、イングランド領に移された。10年ののち、これはカレーに定着し、1558年のフランスによるこの都市の征服に至るまで何らの妨害もなくそこに留まったのである(2)。

それ故にイングランドの羊毛は、他の諸国の産物とは違って、大部分をネーデルラント自体の経済的必要によって吸収されたのである。羊毛貿易は、純粹に通過貿易として考えてはならない。もしそうだとするならば、問題は、この産物の国際市場がどこに打ち建てられたかを知ることが大事である。1318年から1327年の10年間は、ヴェネツィアへの羊毛の集散地として機能したのは疑いなくアンヴェルスである(3)。とはいえ、ステープル歴史上のカレーの時代には、イングランド・フランドル関係が平和的であった久しい間と同じく、少なくともカレーに到着する羊毛のかなりの部分が取引されたのはブリュージュにおいてであった。15世紀においては、イタリア商人が、羊毛をブリュージュで現金で取引するために、カレーでは羊毛を掛けて買い入れるという慣行

があった(4)。これに類似したことはわれわれにはアンヴェルスについて何ら知られていない。このことから、ブリュージュがこの時期には唯一のとはいわないまでも、ネーデルラントでのイングランド羊毛の主要な国際市場であったという結論を下しても無鉄砲なこととは思われないのである。

とはいえ、14世紀末以降は、イギリス経済の諸変化がこの羊毛貿易の、従ってまたこの産物のブリュージュ市場の重要性をますます低下させた。国民的工業の発展に不可欠なこの原料が、国内生産の必要のためにますます以って保持されるようになったのである。イングランド財政上の史料によれば、輸出は1273年の約33000サック(5)から、1355年には35000に上昇した(6)。1446年から1448年の平均は7654サックほどであったが、15世紀末までこの水準がはつきりと保持された(7)。このようなデータの統計上の正確さがどれほどのものであろうとも、これから引き出される全体的な印象は過ちではありえない。他方で、羊毛の輸出が凋落していくとしても、毛織物のそれは驚異的な発展を経験した。1355年に2483反(8)から、1446年から1448年の期間には、53700反に上昇したのである(9)。ところで、ブリュージュ市場がイングランド羊毛に対して全面的に開かれたのに対して、それは毛織物の到着については急速に閉ざされ、そして、そのことがその没落の初めであったと考えられるのである。

14世紀初めから、ブリュージュでのイングランド毛織物の輸入は厳しく禁止された。そしてドイツ商人が1307年にスリュイスの港でこれをここから自国に運び、そのまま荷物を解かず売ることなく持ち出す権利を獲得したのは、この都市の特別な行為の計らいであった(10)。とはいえ、この時期に、フランドルにおいて危険な競争のリスクに対して備えるべきと考えていたとはどうにも思われない(11)。それゆえに、この方策を都市工業の排他性の数え切れない表現の一つとしては考えてはならないだろう。こうした状況は、イングランドの生産がフランドルの毛織物工業の生産物を深刻に脅かし始めたときから大きく変わっていく。1434年に衰微しつつある旧毛織物工業のセンターであるフランドル諸都市は、フィリップ善良公からイングランド毛織物の輸入が彼の全領土において禁止されるという特権を得た(12)。他方、1439年に同じ項目での新たな勅令がこのところを確認したときには大した実効はみられなかった(13)。フランドルに関しては、この禁止はすでにある頃から実施されていたと考えられる(14)。この州、そしてとりわけブリュージュ市は、海外からの毛織物製品に対する彼らの敵意をもちや止めることはなかった。それどころか往時のこの市場の工業・商業上の衰微は、1501年になってフィリップ端麗公に対し、フランドルでのイングランド毛織物のステーブルを彼らの市壁内に置くことを懇願せざるをえないところにまにで追い詰められたのである(15)。事実、15世紀のブリュージュ商業におけるイングランド人の目立たない役割は、驚くほどのものであった(16)。フランドル当局の政策は毛織物商人の離反に行き当たった。しかしながら、この輸出商品が重要性を増していくにつれて、この方策はこの島（ブリテン島のこと）の商人の全体的追放と同義のものとなった。

とはいえ、彼らイングランド商人は、そこで故国の毛織物を捌きうるような貿易の新しい中心地を見つけなければならなかった。その中心地として彼らはアンヴェルスとベルゲン・オブ・ゾーム

の大都市、ゼーランドの外港に見出した。すでに、これより1世紀も前にスヘルデの首府（アンヴェルスのこと）はイングランド羊毛のステーブル地①として選ばれたことがあったが、しかし、この選択は経済というよりは外交的な理由によって決せられたものであった。それは、いまやその衛星都市と共にネーデルラント内でのブリテンの織物取引の中心地となっていくのであり、かつまたこの幸運は経済的な性格の動機に、つまり様々な所からの多数の商人顧客によってこれらの大都市が頻繁に訪ねられたことによるのである。

アンヴェルス商業史の史料がわずかであるにせよ豊富になるのはようやく15世紀の初めになったのである。後に見るように、この時期にその地でのイングランドの取引の確立が既定の事実となるのである。ところでたとえこの島の商人のスヘルデ河岸への到着の日付を決めることは不可能だとしても、少なくとも、これを、ゼーラント——その商業の動きはブラバントのこの都市のそれに密接に結びついていた——の海岸諸都市について持っている情報を拠り所として推測することは可能なことである。ミデルビュルフでは、14世紀末の10年とそれより数年の間にイングランド商業が急に推進されたことは明白であり、イングランド人がこのゼーラントの首府（ミデルビュルフのこと）の外国商人の核となった(17)。ブリテン島の交易がアンヴェルスとベルゲン・オブ・ゾームの大都市との関係を強固なものにしたのがこれと同じ時期であったとは推測されることである。この点についての証左をイールゼケロールドーイングランドから大都市の諸都市に赴くルート上のスヘルデ河東岸にある一のトン税の主張に見るであろう。それは、1415年にその収入がこれら大都市への交易、とくにイングランド交易に依拠していると主張しているのである(18)。この時期にイングランド人の寵愛は、一層アンヴェルスとミデルビュルフに共有されたのである。ホラントとゼーラントでのブルゴーニュの政策の最初の不手際は、15世紀の30年代以降イングランド交易についての優越性をスヘルデの諸都市に保証させてしまったのだ。1418年以降公の権力はホラントとゼーラントの両伯領内でのイングランド毛織物の輸入に反対することを決めた(19)。確かに、同様の諸策がブラバントにおいても、そしてとくにアンヴェルスにおいても布告されはしたが(20)、しかしこの都市は禁止の範囲を狭めようとつねに努力を傾け、そしてそれに成功し、それ故それら禁止令は1447年から1452年の5年間だけ有効裡に実施に移されたに過ぎなかった(21)。この時期に、アンヴェルスでのイングランド交易はすでに十分長い歴史を持っていたのであって、それがネーデルラントの他の海洋州で被ることになる混乱とは違って、そこでは一時的に過ぎない中断という長い混乱をもちや受けることなく済んだのであった。

【原注】

以下、『人文社会論叢』第6号掲載の本論文（上）に従い、原論文では、ページ毎に掲載されている注を節毎に通し番号にして一括掲載した。なお、初出の場合のみ、中の文献の欧文表記を併記したが、2度目以降は略記したことは、（上）と同じである。

- (1) E. リプソン、『イギリス経済史.I.中世』5版、115-162ページ、ロンドン、1929年。(E.Lipson, *The Economic History of England. I. The Middle Ages*, 5ed., p.115-162, Londres, 1929. 本章（「リプソンの著書の」の

- 意味、訳者）は、農業革命を論じている、
- (2) これに先行する部分については次のものを参照。J.デ・ストゥルレル、『ブラバント公国、英国間の…政治的関係』(J. de Sturler, *Les relations politiques...entre le duché de Brabant et l'Angleterre*, o.c.,)及びE.E.リッチ『ステープル商人の勅令集』(E.E. Rich, *The Ordinance Book of the Merchants of the Staple*, o.c.)
 - (3) A. シャウベ「ヴェネツィア・ガレー船の北海航海の開始」, (『歴史学雑誌』101巻, 1908年, 28-89ページ)。A. Schaube, *Die Anfänge der venezianischen Galeerenfahrten nach der Nordsee* (*Historische Zeitschrift*, t.CI, 1908, p. 28-89) この役割についての正確な意味を考えることについては成功していない。
 - (4) リッチ, 『勅令集』, 16-17ページ。
 - (5) A. シャウベ「1273年のイングランドの羊毛輸出」(『社会・経済史四季報』6巻, 1908年, 39-72ページ及び159-185ページ)(*Die Wollausfuhr Englands von Jahre 1273, Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, t.VI, 1908, p. 39-72 et 159-185).
 - (6) リプソン, 『イギリス経済史』I巻, 403ページ, 注6。
 - (7) H.L.グレイ「1446年から1482年のイングランドの貿易」(『15世紀イングランド貿易の研究』E.パウアー及びM.M.ポスタン編(経済・社会史研究叢書, 5巻)10ページ以下, 20-23ページ, ロンドン, 1923年。参照, 同論文集のE.パウアー女史の論文「15世紀イングランドの羊毛交易」39-90ページ。(H.L. Gray, *English Trade from 1446 to 1482* (*Studies in English Trade in the Fifteenth Century*, ed. E. Power et M.M. Postan [*Studies in Economic and Social History*, t.V]), p. 10ss., 20-23, Londres, 1923. Cfr. p. 39-90, E. Power, *The Wool Trade in the Fifteenth Century*.)
 - (8) リプソン, 前掲書。
 - (9) グレイ, 前掲書, 13及び23。
 - (10) 『ハンザ史料』2巻, ヘルボウム編。52ページ121番, 67項。ジリオド『目録』1巻, 266ページ222番67項によって分析されている。
 - (11) 他方でこの時期イングランド毛織物工業は重大な転換を経験していた。リプソン『英国経済史』I, 397。
 - (12) G. シャンツ『中世末期英国の貿易政策』2巻, 657ページ(P.J. 171) ライプツィヒ, 1861年, 2巻(G. Schanz, *Englische Handelspolitik gegen Ende des Mittelalters*, t. II, p. 657 (P.J. 171), Leipzig, 1861, 2vol.)
 - (13) 同上書, 659ページ(P.J. 172) ジリオド『目録』5巻, 139ページ, 1015番による。
 - (14) フランドルに対して禁止を課した1439年の勅令は「古来」から存在した他の政策を曖昧なものにした。このことは, 1434年から1439年に展開したものよりはるかに長い期間を示唆するものである。ジリオド, 前掲書。フランドル内でのイングランドの毛織物政策は知られておらず, また知られるに値するものである。
 - (15) シャンツ, 『英国貿易政策』1巻, 26ページ以下。
 - (16) ジリオドの刊行史料を参照。
 - (17) ウンガー『商業都市としてのミデルビュルフ』32以下。イングランド毛織物の生産と輸出は14世紀末の四半紀にかなりの上昇を示したことが想定される。H.L.グレイ「15世紀におけるイングランド羊毛の生産と輸出」『英国歴史雑誌』39巻, 1924年, 34-35ページ(統計表)(H.L. Gray, *The Production and Exportation of English Woollens in the Fifteenth Century* (*English Historical Review*, t. XXXIX, 1924), p. 34-35 (tableaux statistique)).
 - (18) スネラー『15世紀のワルヘレン』17ページ。
 - (19) ウンガー『商業都市としてのミデルビュルフ』34ページ以下。ホラント諸領邦におけるブルゴーニュの政策の影響を判断するには, 次のヤンスマの興味深い論文を見る必要がある。T.S.ヤンスマ「ロッテルダムにおける1432年の反抗: 一つの時代変化」『歴史学雑誌』53巻, 1938年, 339-365ページ(T.S. Jansma, *Het oproer van 1432 te Rotterdam: een tijdsverschijnsel* (*Tijdschrift voor Geschiedenis*, t. LIII, 1938, p. 339-365)). ホラント, ゼーラント, 及び西部フリースラントにおけるイングランド毛織物の新しい禁止令は, 1428年に布告された。H.J. スミット, 『イングランド, スコットランド及びアイルランドとの貿易歴史史料』1巻, 414ページ, 1012番(王国歴史刊行物) ハーグ。(H.J. Smit, *Bronnen tot de Geschiedenis van den handel met Engeland, Schotland en Ireland*, t. I, p. 414 no 1012 (s Rijks Geschiedkundige Publicatiën) La Haye, 1928, 2vol.
 - (20) プリムス『アントウェルペン史』6巻1分冊, 124-126ページ, 2分冊, 152-164ページ。

- (21) プリムス、同上書、2分冊、155-158ページ。イングランド人の1457年から1458年の離反、同上書159-160ページ、はブルゴーニュ政府の通商政策とは関係がなく地方的な事件の帰結であった。そして、その急速な規制は明らかにイングランド・アンヴェルス関係についての影響を狭めることとなった。

【訳注】

- ①「ステーブル地」中世から近代の交易において特定の品目について指定された市場地のこと。「指定市場」とも訳す。



イングランド人によるアンヴェルス大市への絶え間のない訪問も、従ってベルゲン・オブ・ゾームのそれについても、ヨーロッパ間市場(marchés inter-européens)という性格を付与するには十分ではなかった。イングランド毛織物はやがてこの時期の地域間交易的ななかでかなり重要な商品の一つとなっていくのは疑いないのであるが、その重要性は、かつて以前にフランドル毛織物の輸出の重要性にますます匹敵する程のものであった(1)。とはいえ、イングランド人のこれらの商業活動の舞台となった場所の性格を決定するには、彼らがそれに係わった購入者の人となりに全てが依存していた。もしくは、皮革交易の所ですでに書いたこととは違って、これらの購買者は今回は同じ市場地域から出たのではなかったのだ。彼らが自身で到達しようとした販路とそれらの外国の起源とは、たしかに彼らの交易の全き『ヨーロッパ的』性格を帯びたものだった。これらの購入者は第一にケルンの商業ブルジョワジーの代表者であった。

このラインの首府（ケルンのこと）のブラバント、及びとくにはアンヴェルスとの関係は古い昔にさかのぼるものであった。当初はその関係は地域的交易的段階を越えるものではなかった。ラインの側からの寄与は、本質的にはケルンの直の隣接の地の産物であるワインと金属であり、それぞれラインの渓谷とベルグ（Berg）の地域で産出した商品で成り立っていた。ブラバントの側からは、既述のように、その荷はゼーラント、それにアンヴェルスのものも含めた塩と塩漬けのものであった。この交易の展開については強調しなくとも許されるであろう(2)。ともかくそれは本研究の対象とする事象の研究には全く関係がないのであって、むしろケルン交易の国際的な要素、とくにそのイギリスとの関係を検証する方が適当とされるほどなのである。

イングランド・ライン交易は、10世紀の末以降、かなりの強固さを持つようになり、それは次いで高まる一方であった。ケルンのイングランド毛織物交易への参画はこの間の重要性をかなり高めさせる結果となった(3)。14世紀まではこの関係は、自然の見事な通路——それに対して開放され、そしてライン川、ワール川、メルヴェーデ川へと達しドルトレヒトから北海をつきぬける勢いを有した——を辿っていた(4)。このホラント都市（ドルトレヒトのこと）によってなされた厳しいステーブル政策がケルンの航海の大半をそこから逸らせたのである(5)。正確に言えば、この発展が完成されるのに応じて、イングランド毛織物交易はブラバントに集中していたのである。このラインの都市の商人ははやくもその地（アンヴェルス）でそれを継続しようとし、そこでイングランド

での交易をますます凌駕するような接触を組織するようになった。そして、この時期以後にブラバントの大都市でケルンの取引への言及が増えていったのはおそらく単なる偶然ではなかったことになろう(6)。やがてこのラインの都市は、その地で他のハンザ全諸都市の交易を凌駕したと断言してはばからぬようになっていた(7)。

スヘルデの大都市におけるケルン商人の出現を見た15世紀が彼らのイングランド毛織物の購入を第一のモティーフとしていたことは明白である。この種の活動への言及がきわめて多くなりそれらをいちいち列挙するほどもないことである(8)。荷はいわば毛織物がその主要な要素を成し、他方ではケルン商人がそれに関わりを持つイングランドからゼーラント、及びブラバントへ送り出される荷なのである(9)。

かれらの眼には、アンヴェルスという地は、ローカルなもしくは地域的な顧客が、ほどほどではもはや関係することが出来ない、いずれにせよ補助的な地位では関わりえないような会合の場所となっていた。ドイツ人とイングランド人は本質的にはその地に彼らの間での関係を切り結ぶためにのみ来訪したのである。そして、このような状況こそが、初めて真の国際市場という性格をこのスヘルデの都市に与えたものだったのだ。

このような印象は、ケルン市民がスヘルデの河岸で買い入れた毛織物を送りだす販路を考慮に入れるとさらに一層強められる。事実、この都市はもとよりそれをわずかしこ消費しなかった。これに対してケルンは、ハンザ海洋都市の断固とした反イングランドの姿勢によって助けられながら(10)、ドイツ中部にこの製品の交易の一種反独占的な地位を得るのに成功した。それはバルト海——主にプロシアであるが——に向けてきわめて活発な輸出をおこなったのである(11)。とはいえ、これらの諸市場のなかでフランクフルト・アム・マインの大都市に比較しうる重要性を持つものはひとつとしてなかった(12)。ここの集合地は14世紀以降ドイツ南西部における取引の中心地となった。南へ向けては、この引力はロンバルディアからヴェネツィアにまで感じ取られるほどであった(13)。シュヴァーベンとフランケンの商人はそこを熱心に頻繁に訪れて、彼らの地域——全西欧内での木綿織物工業の中心地——の工業製品の一部分をその地で販売したのである(14)。フランクフルトの大都市はそれ故中世商業組織のなかでは第一に重要な役割を演じた。それらは、いわば高地ドイツが西欧諸国の経済全体に合流する結合点の主要なものであった。イングランドとネーデルラントから輸入される商品の一大部分がフランクフルトの大都市へ向けてこのルートを通ったのであり(15)、そして、その最終目的地へ向けてこのステーブルへそれら（商品）を送ったのはケルンであった。他方で、その商人（ケルン商人）は帰り荷——これは、同じルートを逆方向に辿り、ラインの首府にもち込まれた——を買い入れたのであった。このラインの首府から一部の商品は、スヘルデの大都市へ向けて、そしてその地で（フランクフルト）それらのなかで大きな放射が感じられた地域——とくにイングランドへ向けて——の旅を続けた。

実際、イングランド毛織物の購入に当てるために、ケルン商人は彼ら自身のアンヴェルスへの寄与を強めざるをえなかった。彼らが、すでに久しく、中部ライン全地域と北海に接する諸国との交

易に仲介者として働いていたことは見てきた通りである。スヘルデ河岸におけるイングランド人との強固な関係の確立は、結果としてこの交易の重要性を高めることになった。ブラバントの市場とゼーラントの港を通じてのイングランドへの鋼、真鍮、糸、及び絹織物の輸送について多くの証拠がある。この領域においても、フランクフルトの大市の開花はアンヴェルスの商業の動きに対して有利な結果を感知させた。ケルン商業の仲立ちには、ドイツ南西部で製造された綿織物がやがてブラバントの市場に現れ、そしてその一部分はイングランドにも流れたのであったから(16)、ヨーロッパの交易の大きな流れに彼らの重要性を加速させることに寄与した(17)。結局の所、イタリア・シュヴァーベン交易でさえ、フランクフルト・ケルンの道標を経てアンヴェルスに、ブリュージュ市場の繁栄のもう一つの要素である東洋の香料と産物の交易を危険なまでに打ち負かす一つの延長を見ることがなるのである。

ブリュージュでのオリエントの産物から成る地中海の寄与はこの都市の商業支配の基礎の一つを構成していた。それがヨーロッパ経済の南北両面の間の諸交通の結節点として選ばれたのは、大部分これらのジャンルの商品の存在に負っているのである。14世紀と15世紀の第一・第二三半世紀にライン地方の諸国の商人、その先頭にはケルンの商人が立っていたが、彼らが、ドイツの海洋都市の仲間がそうしたように、ブリュージュで彼らの買い物をするようになったのである(18)。15世紀末の三分の一世紀に、これとは反対にブリュージュの支配はその明瞭さを失っていた。ケルンの商人は時折その香料市場を訪れた(19)。とはいえ、それ以後になると彼らは、明らかに、これらの産物をアンヴェルスやブリュージュの大市にもたらすようになったイタリア・シュヴァーベン交易でしかありえなかったような、もう一つ別の調達源を明らかに用いるようになっていた(20)。したがって、彼らはフランドルの市場（ブリュージュのこと）への彼らの訪問を止めることはできたのであって、そしてその市場をますます訪れなくなっていた。この時期にわれわれが、彼らがブリュージュの宿主に自分の勘定で購入するのを引きうけさせるのを見ることは重要なことである(21)。ときおりブリュージュ市民もブラバントの大市に彼らの都市からそれ以来いなくなったラインの顧客に着いていくようになった。1470年に彼らのなかの一人がベメゲンの大市でケルンの一商人に小樽のテリアカ（thériaque）①を販売した(22)。この都市の遠隔地交易にとって、ブリュージュは、このように魅力の痕跡まで失ってしまっていたのである。もしこの商人がかつてのフランドルの大市場となお関係をもっていたとしても、一つの市場への訪問が彼らに可能とさせることは、実りのある投機を行うことより以上のことはもはやできなかったであろう。彼らが相互間のこれらの活動を相互に有利と判断していたがゆえに、彼らはネーデルラント内にフランクフルトからであれ、あるいはここから大陸の内部に向けてであれ、地中海産物を送り出す様になっていたはずである。そして、ブリュージュがいまだこの交易において何らかの役割を演じているとすれば、それはこの都市が、勃興しつつあるスヘルデの大市のヘゲモニーに従属するようになっていたからである。こうした役割の最後の痕跡は、他方で消滅していくのを遅らせるはずもなかった。15世紀末のこの時期に、地中海産物についてのケルンの交易は、完全にアンヴェルスとベルゲンに集中するようになっ

た。そして、もはやブリュージュはどのようなやりかたであれ、これに関与することはなくなったと思われるのである(23)。

ブリュージュ市場においては知られていなかった筈ではなかったものの、少なくともきわめて稀であった製品、つまりイングランド毛織物の取引を、アンヴェルスにおいて組織することによって、イングランドとケルンはこの地の飛躍の基礎を投じたのであった。フランクフルトの大市の開花は、ラインの首府とフランケン、及びシュヴァーベン^①の諸都市との間の取引を容易なものとし、そして、イタリアとこれらの都市との関係があったおかげで、ヨーロッパの北西部における地中海取引の拠点として、ブリュージュの地歩を無視しうることをこの都市に、可能としたのである。その商人が消滅したことは、より以上に大きな打撃をそれに与えた。この打撃は、ケルンによってアンヴェルスに贈られた取引の流れが、同じ様にブリュージュに定着していた他のナシオン^②の商人を、ブラバントの市場（アンヴェルスのこと、訳者）にその活動の本拠を少しずつ移転させたためにより深刻なものとなったのである。

【原注】

- (1) ローレント『輸出交易』及びL.F.セールマン『中世英国貿易』321-352ページ、オクスフォード、1931年。(L.F.Saleman, *English Trade in the Middle Ages*, p.321-352, Oxford, 1931.)
- (2) われわれは間もなく次の雑誌でケルンとネーデルラントとの間の通商関係についての論文を見ることになる。『ケルン歴史学会年報』*Jahrbuch des Költnischen Geschichtsvereins*. 訳注③を参照。
- (3) M.M.ポスタン「1400年から1475年までの英国とハンザの経済的及び政治的關係」（パウアー・ポスタン編『英国貿易の研究』）,143ページ(M.M.Postan, *The Economic and Political Relations of England and Hanse from 1400 to 1475*(*Studies in English Trade*, ed. Power et Postan), p.143)
- (4) L.エンネン『都市ケルンの歴史』1巻、480、486ページ以下。549ページ以下。及び各所、1863年-1880年、5巻。(L.Ennen, *Geschichte der Stadt Köln*, t.I, p.480, 486ss., 549ss. et passim, Cologne, 1863-1880, 5vol.)
- (5) B.ファン・レイスヴェイク『ドルトレヒトの指定市場法の歴史』（レイデン学位論文）、ハーグ、1900年(B. Van Rijswijk, *Geschiedenis van het Dordtsche Stapelrecht*, (thèse de Haye), La Haye, 1900)。
- (6) ケルン商人の事例<<villam Antwerpie ac nundinas extunc proxime instantes vistaturi>>「アントウェルペン市の市場にこのころから訪問者がふえた」『ハンザ史料』5巻、クンツェ編、145ページ、276番及びクスケ『ケルン商業交通史料』1巻、104ページ309番、109ページ322番、121ページ363番（1897年）；『ハンザ史料』253ページ、494番（1401年）及び281ページ558番（1492年）。
- (7) ケルンの参事会は以下のように記している。<<dat unse burgere de Berger ind Antwerper marte meir dan eyn-liche ander coplude van der Hense besoicht haint>>「われらが市民はアントウェルペンのメイエル市場においてハンザ商人を訪問せり」クスケ,同上書,1巻356ページ1029番（1444年）。
- (8) 1420年から1469年の間にアンヴェルス大市を訪ねたケルンの多数の商人。『ハンザ史料』8巻、スタイン編、619-625ページ、687番。
- (9) われわれはクスケのデータを見ることが出来る。クスケ『史料』『ハンザ史料』、『ハンザ判告書』。
- (10) デーネル『ドイツ・ハンザの繁栄時代』1巻、とりわけ60ページ以下。
- (11) 参照、クスケ『史料』2巻、14ページ24番(1450年)バルト海向けライン取引の基地の中で主要なものとなる海港カンペン（Kampen）を出発点とする。
- (12) A.ディーツ『フランクフルト商業史』1巻、59-62ページ、フランクフルト・アム・マイン、1910年-1925年、4巻。

- (13) A.シュルテ『西ドイツとヴェネツィアを除くイタリア間の中世商業史』、ライプツィヒ、1900年、1巻、499ページ、2巻。(A.Schulte,*Geschichte des mittelalterlichen Handels zwischen Westdeutschland und Italien mit Ausschluss von Venedig*, t. I, p.499, Leipzig, 1900, 2vol.)
- (14) J.ミュラー「中世におけるニュルンベルクの主要ルートの広がり」(*Vierteljahrsschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* t.VI, 1908)35-36。及びK.Th.フォン・イナマ・シュテルネック『ドイツ経済史』、3巻、2分冊、332ページ、ライプツィヒ、1879-1881年、4巻中の3巻。
- (15) ディーツ、前掲書。
- (16) アンヴェルスにおけるアウクスブルクの、ピーブラッフ(シュヴァーベンかママ)、及びウルムのファスティアン織:クスケ『史料』347ページ1087番(1445年)、2巻、159ページ、386番(1465年)及び471ページ、899番(1483年)。
- (17) 同上書、178ページ、393番(1465年)。
- (18) 多数の事例。『ハンザ史料』3巻ヘルボウム編、306ページ、549番(14世紀後半にケルンへ輸送されたいちじく);クスケ『史料』1巻、87ページ、247番(マルクMarckの帳簿で胡椒,ジンジャ,カナメル,サフラン,イチジク,アーモンド,砂糖,1393年-1398年);同上書1巻、171ページ、488番。ジリオド『エスターブル』1巻、494ページ、595番、『ハンザ史料』5巻、クンツェ編、553ページ、1062番(1412年、ジンジャ、ケルン);クスケ、同上書、1巻、190ページ、550番、ジリオド、前掲書、1巻、515ページ、617番;『ハンザ判告書1256年-1430年』コップマン編、6巻、141ページ、182番(1415年、木綿、ケルン);及びクスケ、前掲書、2巻、135ページ314番(1462年、メッシーナの絹、ケルン)。
- (19) 同上書、2巻267ページ552番及び『ハンザ史料』10巻、スタイン編、29ページ、57番(ケルン経由で輸入された木綿);同上書、103ページ172番。及びクスケ、前掲書、294ページ588番(メッシーナ、ケルンの絹、1473年);ジリオド、『ステープル』2巻、231ページ1192番(ケルン、絹、1472年)。
- (20) クスケ『史料』に多数テキストが存在。各所、1467年にケルンからアンヴェルスの大市にブラジルと木綿が相当輸送されている。クスケ、同上書、2巻、186ページ及び『ハンザ史料』9巻シュタイン編217ページ349番。1470年に宝石を、アンヴェルスへ輸送。クスケ『原史料』2巻、527番107項目。
- (21) クスケの特徴的な事例。前掲書2巻、305ページ616番及び『ハンザ原史料』9巻654ページ。
- (22) クスケ、同上書2巻225ページ506番及び『ハンザ原史料』9巻654ページ。
- (23) 事例、クスケ、前掲書、2巻、533ページ、1050番(1487年)、571ページ、1139番(1489年)、587ページ、1173番(1490年);722ページ、1440番(1497年)及び765ページ、1495番(1498年)。

【訳注】

- ① テリアカ 解毒剤の一種。
- ② ナシオン 居留民によって出身地別に組織された団体(nation)。
- ③ 1941年発表の論文がそれと思われる。「15世紀初頭までのケルンと南ネーデルランドの交易関係」。



すでに長いこと、アンヴェルスの大市はイングランドやケルンの商人以外の他の商人によって訪れられていた。とはいえ、彼らがそこに持ち込んだ交易は、すでに見たように、純粋に地域的な性格を有するものであった。同じ様に、15世紀中の相当前までそうであり続けたとわれわれは考えている。実際、南欧商人のコロニーが彼らの馴染んだ居住地を放棄する理由は何らなかったのである。史料の状態が不十分なために、大市に対する彼らの不断の関与を考えることができない(1)。もし彼らがその地に赴いたのであったとしたら、おそらくはそれは、彼らがイングランドやラインの仲間に会うためであっただろう。イングランドとの間で、南欧の人々は直接的な海上交易を

おこなった。ケルンについていえば、この商人がブリュージュにおいて南欧のナシオンに出会ったばかりである。15世紀のうちに、われわれが、フランドルのこの市場がこうむったその状況を考慮しえないにしても、事態は少しずつ変化した。1451年にビスケイのナシオンは、アンヴェルス大市においてハンザとの関係で利益を得ていた(2)。とはいえ、この事実から一般的な意味を持った結論、つまりハンザの商館がこの時期にブリュージュの本拠を放棄し、フランドルに対して経済的封鎖をおこなったことを引き出すことはできない(3)。この8年後に、ヴェネツィアのガレー船団がアンヴェルスに接岸したが、それはブリュージュ市に大洪水があったためである(4)。だが、この時期以降になるとこれらの船団はエスクリューズに錨を投げ続けるようになったがために、この事実は慣習的なものではなくなっていた(5)。フランドルで反乱が起こった1491年には、これらの船団は最終的にアンヴェルスに再びみられるようになっていた(6)。ところが、ヴェネツィアの通商は、東洋との取引からそれをほぼ完全に排除するようになっていたポルトガルの航海の進展によって残酷にも覆されたのは周知の通りである。アンヴェルスにおいて目立たない役割しか演じなくなる理由はこのためなのである(7)。ネーデルラントにおける残りの通商が、長いこと、もう一つの失脚した強力団体であるハンザのそれと同様に、ブリュージュに忠実であったことは特筆すべきことである。ガレー船団が抑圧された後では(8)、ある期間、これらはエクリュースに接岸し始めた(9)。とはいえ、ヨーロッパの交易に対するその貢献は、それ以来無視しうるほどのものになってしまっていて、彼らのアンヴェルスにおける不在も、この地の交易の普遍的な性格に何らの不安の念を抱かせることはなかったのである。

ネーデルラント内における他のイタリアのナシオンの滞在の有為転変を詳細にたどることは難しい。他方でこれらの間のいくつかについては、とりわけフィレンツェ市民についてみると、その交易は、その金融上の活動と比較してみると付随的な役割しか演じていなかった。多数の支店を持っていたフィレンツェの銀行家は、ブリュージュ——そこではスペイン交易のある程度の維持が未だ信用の確立の援助を必要としていた——に一つの本拠を保持していた。フレスコバルディ商会は、1516年にそこに定着していた(10)。しかし、それは、少なくとも1507年以後に代理商をもって、その事業の中心はますます以ってその地に移りつつあった(11)。フィレンツェ市の厳密な意味での通商について見ると、1488年以後もはやブリュージュには何らの痕跡をも見出せないのである(12)。正式な証拠はないとはいえ、それがアンヴェルスに続けられることもほとんどありそうにはない。最後に、ジェノヴァ市民は、1483年には未だブリュージュに定着していたが、その居住地に不忠実さの徴候を示していた(13)。これとは反対に、1501年にそのナシオンは、彼らがネーデルラントの「様々な都市と場所に散らばっている」ことを嘆いている(14)。もう一度、アンヴェルスがこうした移民の主要な中心地となったと言っても間違いではないのである。

このように、15世紀の末には、イタリアの交易はアンヴェルスに移っていた。この離反の直接的な理由は、この世紀末の最後の20年間におけるフランドル伯領の混乱した状況であったことは疑いないところである。これらの諸ナシオンが彼らの古くからの居住地の後継地とするために、アン

ヴェルスを選択した理由を説明しなければならない。この問題を検証すると、われわれには、イングランドとケルンによってスヘルデの河岸に与えられた交易の流れに行き着くことになる。地理的な状況、1000年来の伝統に係わる動機についていえば、これら（ナシオン）はネーデルラント以外に国際的な交易の舞台を見出す筈もなかったのである。ところで、この地域においては、真にヨーロッパ的な関わりを有した実業の中心はアンヴェルスとベルゲン・オブ・ゾームの大市以外にはなかった。したがって、ブリュージュを放棄した人々がそこに定着したのは自然なことであった。それこそ地中海の諸ナシオン⁽¹⁵⁾——他方でその国際的な交易にとっての重要性は、ポルトガルを先頭として新しい商業強国を利用して大きく衰退していた——が、再結集した解決法であった。

市場の戦いにおいてポルトガルが採った態度は、イタリアのそれに似たものであった。彼らがその勃興しつつある植民地交易の商品、つまりアフリカの象牙⁽¹⁶⁾、それからマデイラの砂糖⁽¹⁷⁾で利益をあげたのはブリュージュであって、15世紀を通じてその地に忠実であった。それとは反対に、1485年以後になると、スヴィンの河岸には彼らの活動の痕跡は見られなくなる。彼らが再び史料に見出されるようになるのは、彼らが定着したアンヴェルスにおいてなのである。1494年にはその地にポルトガル王の代理人の存在が言及されるようになる⁽¹⁸⁾。彼は、おそらくはこの時点では、未だそこに定住してはいなかった。何れにしてもそれは1498年になってなされたのである⁽¹⁹⁾。そこでのポルトガルの活動は、16世紀半ばまで、際立った地歩を占めた。植民地物産の交易が彼らの輸入品の中心的な要素を占めた。この点でいえば、その役割は、ブリュージュの繁栄期におけるイタリア人のそれとぴったり比較できるのである。とはいえ、彼らの輸出について見ると、先行者のそれとはかなり異なった内容をもつものであった。ブリュージュでは、ポルトガルの交易は帰りがけがなかったがために、決して前面に出ることはなかった⁽²⁰⁾。反対に、アンヴェルスは、そのライバルが決して持ちえなかったようなものになる幸運を獲得することになった。つまり、そこは、植民地へ向けてのポルトガルの輸出品の基礎となったジャンルの商品である金属品のヨーロッパ第一の市場となったのであった。アンヴェルスがそのオリジナルな性格、われわれがその「近代性」と呼びうるものを獲得したのは、このような状況の下においてである。こうした繁栄を引き起こしたメリットは、ケルンをも生き返らせた。というのは、それがアンヴェルスにおける国際的活動を活発にしたのと同様に、ケルンの交易がその地に、当初からそれに緊密に結びついていた他の諸都市の交易——そして、当然のことながら、それがその仲介者としての役割から解放されたあとでもそれによって辿られた道に止まっていた——をその航跡に引き入れたからである。

ケルンのドイツ内陸部に位置した諸領邦との関係は、言われているように、より強いものであった。たとえば、15世紀に東方スラブの中心市場（*entrepôt*）となっていたブレスラウは、西欧との経済的連携をもったのは、その仲立のためである⁽²¹⁾。こうした仲介は、1450年以後になって、ブレスラウとアンヴェルスとの間の直接的関係の確立によって異質なものではなかったであろう。実際の所、ラインの首府の交易は、中世の末期には、明らかな後退を示していたようである⁽²²⁾。これがこの時期においてシレジエン（ブレスラウはシレジエンの中心地）の交易が実現した力強さの

理由であったか、あるいは影響であったかどうかを決定することは難しいことである。それがどうであったとしても、その商人がこの市場を目覚めさせたのであるから、ブレスラウの商人がブラバントの市場を脚繁く訪れ続けたのは自然なことであった(23)。他方で、アンヴェルス市場の飛躍に対するかれらの寄与は過大視されてはならない。その活動が中心的位置を占めた皮革商人は、地域的な購買者があったに過ぎないといえる。これとは反対に、南ドイツの商人との直接的な交易ははるかに大きな成果を持つこととなった。それは、ブレスラウの交易が決して持たなかったと思われるある程度の規則性を持つようになった。どう見ても、ブラバントにおけるケルンの活動がなかったとしたら、それ（ブレスラウ）は、その発展の枠組みに資するために同じ様な決意を以ってアンヴェルス市場を選択することはなかったであろうということである。

知られているように、当初からケルンと高地ドイツの諸都市は、フランクフルトの大都市で取引の利益を得ていた。シュヴァーベンとフランケンの商人は北方へ向けて進出する必要性を稀れにしか経験することがなかったことは明らかである。しかしながら、15世紀のうちに、彼らはラインの首府にますますもって浸透していった。このようにして、彼らとケルンの同業者との間の利害の緊密な共同体が生まれた(24)。少しずつではあるが、彼らはこれらの同業者との共同事業から解放されていき、そして彼ら自身がネーデルラントとの関係を生み出していった。彼らがアンヴェルス——彼らの代理人がかつて訪れていた市場であるが——を頻繁に訪れ続けるようになったのは自然なことであった。1465年には、ニュルンベルクの一商會がすでにその地でイングランド毛織物との交換で皮革を取引したことがあった(25)。これらの関係がこの世紀末、つまり高地ドイツ——そこでは経済的な優位がアウクスブルクの人々の手に移りつつあったが——がアンヴェルスに莫大な量の金属を販売するためにもたらしたが、その開発が以後その経済的な動向の基礎となったのであるが、この時点で、驚くべき飛躍を受けることとなる。

実際に、15世紀の末に、高地ドイツ諸都市の商人ブルジョワジーは、チロル、ハンガリーの、そして一般的に中央ヨーロッパ全体の鉱山産業に、新たな、豊穡な活動の場を見出した(26)。彼らは、ヨーロッパ経済のこの部門を直ちに支配するようになった。金属の生産を国際市場に向けて展開するようになる前に、その選択はためらうことなくアンヴェルスに向けられた。この土地を、彼らは香料、イングランド毛織物、あるいは綿製品との通商——かつてはその任務をケルンが担っていた——をおこなうためにしばらく前から訪れていたのであった。そして、ポルトガル人をその地に引きつけたのはまさしく彼らの存在であった。実際、ポルトガル人は、ギニアやインドの人々に銅や銀を販売するために、植民地物産の輸入品と均衡させたのである。アンヴェルスが彼らにとってはこうした産物の主要な市場となった。例えば、1498年から1505年までの間に、彼らは63万9692リーヴルの銅をそこへ向けて輸出した(27)。彼らの側からは、熱帯産物の積み荷をアンヴェルスに向けてもたらすことで、莫大な額の購入に対する支払いをおこなった(28)。このようにして、アンヴェルスにおいて通商の流れ——これについては、ネーデルラントの毛織物取引が13・14世紀に授けられたのと同じように、そしてまた、15世紀にイギリス繊維品取引がその本来的な性

格を得たのと同じように、近代の開始時の経済の動向を支配するといわれているが——が打ち立てられたのである。

こうした観点からすると、アンヴェルスにおけるシュヴァーベン金属の交易の確立は真に普遍的な意味を持つものであった。この命題に対して絶対的な厳密さを認めたくないとしても、近代という時代は、中世ががそれで以て成り立つ繊維の時代とは反対に、ヨーロッパ経済において、そしてヨーロッパの人々の植民地の拡大の結果として、世界全体においては、金属の時代と呼ばれる時代の開始を記すものである。この時代に開始され、そしてわれわれの時代に至るまで発展することを止めない産業革命は、その結果として、金属の重要性を利して、毛織物の相対的な経済的意味をますますもって縮小するものとなった。この新しい時代は、15世紀の末以後中央ヨーロッパの金属資源を大きく開発することによって始められたものなのである(29)。この新産業は、とるに足らぬものであったが、もしこの莫大な量の一次原料が西洋の工業化された国々に遠くまで再分割されず、またその労働に提供されなかったとすれば、存在しえなかったものである。こうして、この原料の商業的売り場によって演じられた中心的役割を知ることができる。アンヴェルスの役割は、中心的なものであり、長期にわたって唯一のものであったが、近代経済がまったき意味で生み出されるゆりかごとしての性格を持つものと考えることが出来る。アンヴェルスはたんにブリュージュの後継者であっただけではなかった。そこに移ることによって、国際的な大通商は、ブラバンドの市場を一つの新しい経済時代の展示物としてわれわれに知らせてくれる様々な性格を帯びることになった。人々は正當にも、それを現代経済状況の直接の源泉と考えることができる。

【原注】

- (1) 「かくして、ドイツ・ハンザ、イングランドのナシオン、スペイン人、ジェノヴァ人、フィレンツェ人、そしてさらに別の様々な国々と地域の多くの人々がアンヴェルスにおいて歳市にてその様々な商品を持ちて来集してくる…」 <<Alsoe vele goeder notabele coopliede van der Duytscher Hansen, Engelscher nacien, Spaengiaerden, Genevoeysen, Florentynen ende meer andere uut diversen landen ende plaetsen liet 't Antwerpen in de jaermercten plegen te comene met hueren goede ende coepmanscapen ...>> 『ハンザ史料』8巻、シュタイン編、440ページ、689番(1458年)。
- (2) 同上書、83ページ、112番a6項。
- (3) フリキウス「経済戦争」(『ハンザ歴史雑誌』58巻、1908年)52ページ以下。(Friccius, Wirtschaftskrieg (*Hansische Geschichtsblätter*, t.LVIII, 1908), p.52ss.)
- (4) 『ハンザ判告書』1431年-1476年、フォン・デル・ロップ編、4巻、512ページ、725番。
- (5) 同上書、1467年、1470年及び1485年のもの。ジリオド『エスターブル』2巻、155ページ、1098番、190ページ、1138番及び246ページ、1277番。
- (6) ゴリス『商人コロニー』152ページ、注3。
- (7) 同上書、71ページ。
- (8) ジリオド『エスターブル』2巻、341ページ、1328番(1501年)。
- (9) 同上書、2巻、369ページ、1358番(1505年)、469ページ、1450番(1517年)、521ページ、1487番(1520年)。
- (10) 同上書、2巻、465ページ、1445番。
- (11) エーレンベルク『フッガー家の時代』1巻、278ページ。

- (12) ジリオド『エスターブル』2巻, 263ページ,1245番。
- (13) この時点で、彼らは、ブリュージュの反乱によって、以下の権利を獲得した。(つまり)「われらが都市ブリュージュを去りてわれらがアンヴェルスに赴くことを。それらを売り配分する場所として、ある程度の量の絹織物とキャメロット織を運ぶ」 <<amener et retirer de nostre ville de Bruges en nostre ville d'Anvers...certaine quantite de draps de soye et de camelotz pour illeux les vendre et distribuer>>同上書,248ページ,1218番。ブリュージュの指定市場を確保することが不可能であったがために、アンヴェルスのみに訴えるということは意味深いことである。
- (14) 同上書, 2巻,343ページ,1331番。
- (15) すでに見たように、毛織物交易に関与したヴェネツィア人とスペイン人を別として。他方でここでは半島のカンタブリア山地の大多数のスペイン人が関与している。
- (16) ジリオド『エスターブル』2巻, p.133,1068番 (1465年)。
- (17) 同上書, 2巻, 221ページ,1177番 (1474年) 222ページ, 1179番 (1475年) ,252ページ, 1225番 (1485年)。
- (18) エーレンベルク『フッガー家の時代』2巻,4ページ,注2a。
- (19) そして、ゴリスが書いているように1499年ではない。『商人コロニー』38ページ。参照, ブラームキャンプ・フレイレ『フランドル商館誌』88ページ。
- (20) 参照。ファン・デン・ブッシュ『フランドルとポルトガル』(Van den Bussche,*Flandre et Portugal*)。次の冊子。J.M.ロペス『16世紀アンヴェルスにおけるポルトガル人(アンヴェルス,1895年)』(J.M.Lopes,*Les Portugais à Anvers aux XVIe siècle* (Anvers,1895)は、経済史に対して関心を示していない。
- (21) ロシアとポーランド(ザクセン,シレジエン,ガリシア) 交易に関係を有した市場とケルンの関係。参照,クスケ『史料』各所。及びE.デーネル『ドイツ・ハンザの繁栄時代』2巻, 271ページ以下。
- (22) デーネル,同上書, 2巻, 60-61ページ。
- (23) 『ハンザ史料』8巻,シュタイン編,305ページ,466番 (1454年) ,681ページ,759番 (1470年) 及び注2 (1454年-1456年) ;『ハンザ判告書1431年-1476年』,フォン・デル・ロップ編,6巻,445ページ, 473番 (1471年)。
- (24) ケルンにおける高地ドイツ交易の多数の事例。クスケ『史料』各所。
- (25) 『アントウェルペン古文書雑誌』19巻 (アンヴェルス,年代なし) 337ページ以下。(Antwerpsch Archivenblad,t.XIX(Anvers,s.d.),p.337ss.)
- (26) エーレンベルク『フッガー家の時代』1巻,88ページ以下及び各所; J.シュトリーター「フッガー家の時代のシュヴァーベン商人」『シュヴァーベンラント。シュヴァーベン文化故郷雑誌』1巻,1934年,197-216ページ。以下に再録『豊かなアウクスブルク。ヤコブ・シュトリーターの15・16世紀アウクスブルクと南ドイツ経済史論集』H.F.ダイニンゲル編,29-45ページ,ミュンヘン,1938年) (J.Strieder,*Der schwäbische Kaufmann im Zeitalter der Fugger*(dans *Schwabenland.Zeitschrift für schwäbische Kultur und Heimatpflege*,t.I, 1934,p.197-216, réimprimé dans *Das reiche Augsburg.Ausgewählte Aufsätze Jacob Strieders zur Augsburger und süddeutschen Wirtschaftsgeschichte des 15.und 16.Jahrhunderts*,ed.H.F.Deininger,p.29-45,Munich,1938)。
- (27) ブラームスキャンプ・フレイレ『商館誌』121ページ。
- (28) ゴリス『商人コロニー』239-243ページ参照。エマニュエル大王治世(1495年-1521年)のアンヴェルスにおけるポルトガル商館の輸出入貿易の統計表。ブラームスキャンプ・フレイレのデータによる。
- (29) ヤコブ・シュトリーター「フッガー家の時代のドイツ鉱山金属産業」『ドイツ博物館。研究と報告』3巻6分冊, ベルリン,1931年(Die deutsche Montan- und Metallindustrie im Zeitalter der Fugger(*Deutsches Museum. Abhandlungen und Berichte.*))及び『豊かなアウクスブルク』119-155ページ。

解説

ここに訳出したファン・ハウテの論文「アンヴェルス国際大市場の生誕」の内容については、本文そのものによるべきで、改めて解説する必要はないであろう。ただ、二、三、この論文の意義と

評価、その後の研究史の展開について触れておきたい。

この論文の特徴は、第一には、ヨーロッパ国際経済の動向という大きな枠組みのもとで、中世末期から16世紀にかけて繁栄したアンヴェルス市場の発展の契機を、地域史的視点、それに国際的視点——近年の研究状況に従えば「ヨーロッパ世界経済の形成・発展」といいかえてもいいが——から析出し、様々な地域間交易の結びつきの連鎖を示した点にある。その後の経済史研究の一つの方向を打ち出したという点でも画期的な意義を有すると考える。

第二に、上記と関連することであるが、北西ヨーロッパを軸とした国際経済について、ブリュージュからアントウェルペンへと移る中心的市場の移動、その経済的契機——ブリュージュから見れば衰退の、アントウェルペンから見れば興隆の契機を——抉り出し、そのことによって、いわばヨーロッパ経済史を整理したことである。1925年のゴリスに始まると考える(1)ファン・ハウテのアントウェルペン市場史研究のサーベイという形を取って彼はそのことを示した。いいかえれば、中世のブリュージュ市場と16世紀のアントウェルペン市場の特質を対比させたわけで、この点については、後にW. ブリュレの厳しい批判①を受けることとなる。

【訳注】

① 訳注②本訳（上）『人文社会論叢』（社会科学篇）第6号、84ページのW・ブリュレ論文を参照。

（ファン・ハウテ論文の訳出に当たって、誤りなきを期したが、誤りがあれば、全て訳者中澤の責任である。）